

助成年度：平成6年度

[所属] 山形大学 教育学部

[役職] 教授

[氏名] 代表者 前田 保夫 (他計5名)

[課題]

中山間地域における児童生徒参加型の環境学習教材の開発

[内容]

この研究は日本人の人間形成に深くかかわってきた里山（中山間地）における人間と自然とのかかわりを環境教育の視点でとらえ、身近な自然を守ることが、地球的規模の環境保全につながることを体験的に理解させるための学習教材を作成しようとするものである。

研究対象地域は山形県白鷹山を中心とする地域で、人間の活動が殆ど及んでいない原自然に近いブナ自然林、営利目的行為で半区画が剥ぎとられたミズゴケ湿原の植生、全く生態系や下流域への影響を無視してゴミ投棄を行い水質悪化を起こした沼の3例について、児童生徒の発達道程に合わせた副読本を印刷刊行した。

白鷹山のブナ林では開花期における開花が下層の草本層から始まり、高木層に及ぶこと、階層構造のしくみを測定作業を通して体験的に理解させる。琵琶湖湿原では開花の順に観察し、ホロムイソウ、ヒメカイウなどの周極植物がこれらの植物群落のなかに自生すること及び、この沼の気候環境が北海道東部なみであることを記述し、原自然保護の意義を理解させる。苔沼は毎年夏になるアオコが発生するが、それは1974年に生ゴミを主とする産業廃棄物が上流に投棄された原因であることを水質観測、当時の反対運動の記録の掘り起こし等を通して立証した道程をまとめた。

以上の調査結果を次の3つの冊子に編集し、山形県内の小・中学校全校に環境教育の副読本として配布した。

1. ブナ林のやくそく（小学校中～高学年）
2. 琵琶沼はみんなの宝（小学校高学年）
3. 山のアオコ（中学校）